

- ポール・グライスによる意味概念（ある事柄や記号が、「何かを意味する」といえること）の2つの区分が示される（第3段落目 p.85）

1. 自然的意味： 「意図をとまわらないある事態が何かを『意味する』ケース」（渡辺,p.85）

2. 非自然的意味： 「意図的に発せられた記号が何かを『意味する』ケース」（渡辺, p.85）

・自然的意味の例： 「あの発疹は、はしかを意味する」（渡辺, p.85, 訳書¹ p.223, 原著² p.53）

・非自然的意味の例： （運転手がバスの）「ベルを三回鳴らすのは、バスが満員だという意味だ」（渡辺, p.85, 訳書 p.224, 原著 p.53）

- 「自然的意味」とは

意味を意図的に生じさせようとする人が存在せずに、意味される事柄や記号（はしかの発疹など）が、その意味内容と一体化した事実を示すこと。グライスの邦訳を手がけた清塚は、最近の論文で「自然的意味」を以下のように2つの側面から説明する³。1つは、「自然的な意味での『意味する』は、意味された事柄が事実として成立していることを含意している（「発疹」と「はしか」は一体化した意味内容であり事実）。もしもそれが事実でないならば、『意味する』は偽であることになる」（清塚 p.3）とされる。つまり、「発疹がはしかを意味する」際、その発疹が正しく「意味する」限り、その後「しかし彼ははしかではなかった」とは言えない（清塚 p.3, 訳書 p.223, 原著 p.53）。2つ目に、「～が自然的意味として〇〇を意味することは」を主語として、そこからさらになんらかの結論を導くことは、論理的、言語構造的にできないとされる。つまり、「発疹がはしかを意味することは」という主語から、「死を意味する」や、「誰かが彼を殺そうと意図したものだ」などと結論することは飛躍である。さらにまた、「発疹がはしかを意味することは、彼がはしかであることを意味する」というのは同語反復となるので不適切である。なお、自然的意味という、「雲が雨を意味する」や、「煙が火を意味する」といった自然現象の因果関係が意識されるが、グライス自身は、とくにそのような自然（nature）の事柄を示唆してはいない。

※ 同語反復（トートロジー, tautology）：「地球は地球だ」のように、主語から新たな情報があらわれない語法。なので、「帰結」や「結論」を導いたとは言えない。

- 「非自然的意味」とは（“means NN”, 「意味 NN する」）

意味を意図的に生じさせようとする人が存在し、意味される事柄や記号（ベルを三回鳴らす）は、その意味内容と独立しているもの。その意味で「自然的意味」とは対照的な性格をもつ。つまり、上にのべた清塚の「自然的意味」の2つの側面になぞらえて「非自然的意味」を説明するならば、「ベルが三回ならされても、実は、満員ではなかった」ということもありえる。なぜなら、「ベルを三回ならすこと」と「客で満員」は、もとより事実として一体化している現象ではないからである。また「ベルを三回ならすことは」という主語から、何らかの結論を導くことは論理的、言語構造的に可能である。つまり、「ベルを三回ならすことは、これ以上乗車しないでほしいことを意味する」と結論することは可能である。

- ポール・グライスの論文「意味」やその邦訳において、「自然的意味」は “means NN”（原著 p.54）や「意味 NN する」（訳書 p.226）のように表記され、「自然的意味」と区別されている（NN とは non-natural のこと）。

¹ ポール・グライス 「意味」、清塚邦彦訳『論理と会話』東京：勁草書房、1989年=1998年、223-239頁。

² Paul Grice, “Meaning,” in *Semantics*, edited by Danny D. Steinberg & Leon A. Jakobovits. (London: Cambridge University Press, 1971), pp.53-59.

³ 清塚邦彦「グライスの意味理論における『自然的意味』の位置づけについて」、『山形大学人文社会科学部研究年報』第16号、2019年2月、1~29頁。

- グライスによれば、『非自然的意味』であり意図を伴っている発話であったとしても、それがただちに「意味をもつ」わけではない (渡辺, p.85)。
「意味を持つための条件」を、グライスは、論文「意味」で明らかにしようとした。
それはつまり、グライスによる「非自然的意味」のグライス自身のための定義ともいえる。

- 「非自然的意味」が発生する局面に必要な条件 (p.86, 第5段落目)

- a. 記号 (X) には、発信者 (a) が、受信者 (b) に対して、引き起こしたい具体的な内容 (c) が存在すること
- b. 発信者 (a) には、自らの発話が、まさに自分 (a) の主張として受信者 (b) に伝えようとする〈コミュニケーションの意図〉があること
- c. 記号 (X) の内容は、発信者 (a) による〈コミュニケーションの意図〉の存在を受信者 (b) が認識することで、読み取ることができる

- 「Bさんのハンカチ」の例が、「非自然的意味」が発生させていない、といえるのはなぜか) p.85 —第4段落目

- a.= OK (記号の発信者 A さんは、受信者 C さん (刑事など) に対し、「Bさんが殺人を犯したと感じさせたい」、という具体的な内容が存在する)
- b.= NG (記号の発信者 A さんは、受信者 C さん (刑事など) に対し、それがまさに自分の主張として伝えようとする意図はない)
- c.= NG (受信者 C さんは、記号「Bさんのハンカチ」を、発信者 A さんのコミュニケーションの意図を認識しないままに、内容を読み取っている) = 「非自然的意味」ではなくて、「自然的意味」と同じように、刑事などはハンカチの意味を読み取っている。

- 「この写真は X 夫人の浮気を意味する」の例が、「非自然的意味」が発生させない、といえるのはなぜか) p.86 —第5段落目

- a.= OK (記号の発信者 W 氏は、受信者 X 氏 に対し、「あなたの夫人が浮気をしていると感じさせたい」、という具体的な内容が存在する)
- b.= OK (記号の発信者 W 氏は、受信者 X 氏 に対し、それがまさに自分の主張として伝えようとする意図をもっている。)
- c.= NG (受信者 X 氏は、記号「妻の浮気写真」を、発信者 A さんのコミュニケーションの意図を認識しないままに、そして、その意図とは全く無関係に、写真の内容を読み取っている。)
つまり、受信者 X 氏は、発信者 W さんによる「非自然的意味」を読み取っているのではなく、
受信者 X 氏自身において、「自然的意味」と同じように、写真の「事実」としての内容を読み取っている。

- 発信者の〈コミュニケーションの意図〉の存在の有無を前提として生ずる対立関係

- ・(受信側で) 記号の「意味」を読み取る (=非自然的意味を読み取る) ←→ 「事実」を推測する (自然的意味を読み取っているに近い)
- ・(記号が) 記号自身以上の他の価値をしめしている (情報がある) ←→ 同語反復になっている (情報がない)